

アール・スクラッグスの RB-グラナダ

このバンジョーについて現存する文書の中で最初のもは、フィッシャー・ヘンドリーの手紙である。日付は、1934年6月となっている。このRB-グラナダは、1934年はじめに、工場から発注（order 納品？）され、フィッシャー・ヘンドリーが、ジム・グレイヴスというディーラーから新品として購入したと言われている。ジム・グレイヴスは、ノースカロライナ州ウェイズボロ（Wadesboro）の理容師だった人物で、どうやら、当時ノースカロライナ州ウェイズボロ周辺ではただひとりのギブソン正規ディーラーであったようだ。この情報は、デュイット・ウェレスの息子バック・ウェレス（Wheless）から得た。デュイットは、WBT局に出演していたノースカロライナのバンジョープレイヤーで、フィッシャー・ヘンドリーの親しい友人のひとりでもあった。バック・ウェレスから聞いた話によると、デュイット・ウェレスとフィッシャー・ヘンドリーは、それぞれ別々にバンジョーを注文した。数ヶ月後、1934年中頃に、彼らは一緒に、それぞれのオリジナルフラットヘッド5弦RB-グラナダをこのウェイズボロの理髪店へ受け取りに行った。つまり、彼らは、同じ日に同じ場所で同時にRB-グラナダを受け取ったのである。バックがこのできごとを私に語ってくれたとき、よどみなく言葉が口から出てくる様子から、彼がずっと父のデュイットからこの話を聞いていたことは明らかだった。これには、すっかり感銘を受けた。

世界で最も有名なギブソン・バンジョーに関わるこの手紙には、畏敬の念を抱く。バックは、ヘンドリーが購入した日付など、RB-グラナダ、シリアルナンバー9584-3の歴史のことなど、まったく考えてもいなかった。だが、そのグラナダは、後にアール・スクラッグスが所有し、ずっと演奏することになる楽器なのだ。購入した日付はまったくわからず、あの日バックの父が購入したもう1本のRB-グラナダの情報を求めて私がバックに電話しなかったなら、RB-グラナダ9584-3の最も重要な情報は永久に失われていたであろう。

1935年版ギブソン社カタログによると、新品の販売価格が200ドルで、#522 プラッシュュ張り（ピロードの一種）ケースが22ドルであるので、このバンジョーはその金額で販売されたと思われる。デュイット・ウェレスとフィッシャー・ヘンドリーはWBT局で仕事をしているときに友達になった。また、ふたりは釣り仲間でもあった。フィッシャー・ヘンドリーは、1934年にWBT局で仕事をするためにノースカロライナ州シャーロットにやってきた。すでに有名なミュージシャンであり、いくつか他の局でラジオのアナウンサーをしていた。フィッシャー・ヘンドリー自らがタイプし、サインしたこのオリジナルの手紙は、「クレイジー・ウォーターズ・クリスタルズ」社のレターヘッド入りである。そこには、彼がノースカロライナ州のバンジョーチャンピオンの座を9年間守り続けていることが記されている。また、WBTが宣伝用に使うヘンドリーらの写真を15,000枚もプリントしたとある。2枚の絵はがき（本文 pp.50）は、1934年6月付けのこの手紙に同封されている

たものである。この2枚の絵はがきは、1934年6月までにヘンドリーがこのバンジョーを入手していたことを証明するものであり、RB-グラナダ 9584-3の最も初期の写真であると思われる。その歴史において、最も有名なギブソン・バンジョーであることは疑いようがない。

私にとって最も皮肉に思える出来事は、1934年から35年頃に始まっている。当時、まだ10歳か11歳だったアール・スクラッグスは、ラジオでフィッシャー・ヘンドリーがバンジョーを弾くのを聴いていたにちがいない。そのバンジョーが、後に自分のものになり、そのバンジョーを有名にするとは、まったく思いもよらなかったであろう。1936-37年頃、ヘンドリーは、このバンジョーを売って新しいバンジョーを買うことにした。ヘンドリーは、見た目のきれいな新しい楽器を好んだようである。少しくたびれて来た頃に「デュイット・スナッフィー・ジェンキンス」にRB-グラナダを売った。

スナッフィー・ジェンキンスは、ヘンドリーがシャーロットのWBT局で仕事をしているときに会った別のバンジョープレイヤーである。それ以前に、このふたりはサウスカロライナ州コロンビアのWIS局でも仕事をしていた。記録が残っていないので想像するしかないのだが、スナッフィー・ジェンキンスがこのバンジョーに支払った額は、せいぜい100ドルから150ドルだったのではないか。なぜなら、すでに2年か3年経っており、演奏によるキズや摩耗があったであろうと思われるからだ。このように結論づけたのは、その3年か4年後に、スナッフィーが、若いダン・リノに90ドルでこのバンジョーを売ったということが知られているからである。

スナッフィーは、このRB-グラナダで、J.E.メイナーやハイヤード・ハンズと演奏し、いくつか録音も残した。1939年頃のスナッフィー・ジェンキンスの貴重な写真（本文 pp.51）には、白いヘッドガードを装着したRB-グラナダ 9584-3がフィーチャーされている。スナッフィーは、1940年に生涯弾くことになる有名な工場のヘッドガードを装着したRB-4を手に入れるのだが、この写真はまた、スナッフィーが、そのRB-4を手に入れる前に、このRB-グラナダを弾いていたことを証明している。

1930年代後半までに、スナッフィー・ジェンキンスには、ラジオで彼の演奏を食い入るように聴くフォロワーが何名かいた。そのようなフォロワーは、ライブ演奏や、当時スナッフィーが出演していた劇場のショーを見にやってきた。スナッフィーは評判のステージコメディアンとしてよく知られていたが、彼のまじめなフォロワーたちはコメディには興味なかった。彼らは、ノースカロライナの狭い地域で誕生したと思われる、この新しい、バンジョーのスリーフィンガー奏法を学ぼうとしていた。この奏法はたいへんに人気があった。

この初期のフォロワーのひとりが、サウスキャロライナ州バッファローからきた痩せた少年で、名前をドナルド・リノといった。若いリノは、数年の間、チャンスがあればいつでも、スナッフィーとピックし、話をした。あるとき、スナッフィーは、オリジナルフラットヘッド 5 弦 RB-4 を見つけ、こちらのほうが気に入った。そこで、ティーンエイジャーのリノに、RB-グラナダを 90 ドルという破格の値段で売ることにした。この買い物の後まもなく、モリス・ブラザーズと一緒にこのグラナダを弾くダンの姿が写真に捉えられている。じっくり見ると、オリジナルのゴールド・クラムシェル・テイルピースと、スナッフィーが装着した白いヘッドガードとが装着されているのがわかるだろう。この写真は 1940 年代初期のもので、リノは 14、15 歳だったと思われる。ワイリーとジークのモリス・ブラザーズは、アコースティックギター、ベース、マンドリン、フィドル、スリーフィンガー奏法の 5 弦バンジョーという、後にブルーグラスのフルバンドとして知られるようになるスタンダードなインストルメンテーションを取り入れた最初のバンドのひとつだった。数年後、若いアール・スクラッグスもまた、このバンドで仕事をするようになる。

1945 年 12 月から 1948 年 2 月の 2 年あまりの間、アール・スクラッグスとレスター・フラットは、ビル・モンローのバンドで、ブルー・グラス・ボーイズのメンバーとして共に仕事をした。今日では、このバンドは、「ブルーグラス」と呼ばれることになった音楽スタイルの絶対的な礎であり、コーナーストーンと見なされている。1948 年 2 月はじめ、フラットとスクラッグスは、モンローと袂を分かち、彼らのバンド、フォギー・マウンテン・ボーイズを始めた。

1949 年はじめ、アールとダン・リノは、バンジョーをトレードすることにした。このトレードは、今では伝説となっている。この有名なトレードについて詳しくは、本書の「ダン・リノの RB-75」を参照して欲しい。要約すると、アールは、ダンに「ネリー」として知られているきれいな RB-75 をトレードして、その代わりにこの RB-グラナダを手に入れた。リノは、マーティンギターをおまけとしてつけた。というのは、このグラナダのコンディションが劣化していたからである。グラナダを入手してまもなく、アールは、いくつかりペアをしなければならなかった。

このバンジョーは、弾き込まれたために、摩耗や破れがかなりあったようである。フィシャー・ヘンドリーが、3 年間ハードに弾き、その後、スナッフィー・ジェンキンスが、約 4 年間このグラナダを携えて移動して演奏した。そして、リノは、1943 年に入隊するまで、さらに 3 年間かなりハードに弾いた。入隊したとき、彼はバンジョーを家に置いていったのだが、ケースにフィドルのロージンを入れたままにしていたことに気づかなかった。数年後家に戻ってみると、熱でロージンがケースの中で溶けて、グラナダ全体に付着していた。リノは、ロージンを落としてきれいにしようとしたが、フィニッシュと金メッキのかなりの部分も、一緒に取り除いてしまった。彼は、その後も 4 年間、グラナダをハードに

弾き続けた。

以上のことから、想像して欲しい。アールがこのグラナダを手に入れたとき、製作されてから 15 年ほどであったが、どんな外見をしていたかを。アールが個人的に私に話してくれたことによると、「そのバンジョーの外見はひどいありさまで、数年間太陽と雨に曝された、古いペニーの銅の色をしていた」そのため、リノはトレードで、マーティンギターをおまけにつけたのである。

また、このバンジョーには、見た目の美しさよりももっと深刻な問題があった。オリジナルのテンションフープがひび割れており、交換する必要があった。現在のバンジョープレイヤーにはほとんど理解できないことだが、当時のプロのバンジョープレイヤーは、カーフスキンのヘッドが割れると、交換しなければならず、移動が多く、日常的に長時間弾くプロのミュージシャンであれば、頻繁にヘッドを交換しなければならなかった。当時、どれくらいの頻度でヘッドを交換していたか、アールに尋ねたところ、1 年で 6 個から 7 個だと答えた。つまり、ほぼ 8 週間ごとに新しいヘッドに交換していたことになる。

さらに考慮すべきは、カーフスキンのヘッドがたいへんに高価だったということである。1930 年代後期のギブソン・カタログでは、新品の「ジョゼフ・ロジャース・スリースター」カーフスキン・バンジョーヘッドの価格は 7.5 ドルであった。新品の RB-75 が 75 ドルとなっている。つまり、ヘッドの価格は、バンジョー全体の価格の 10%もしたのである。現在の価格で考えると、3500 ドルの新品のバンジョーの中で、ヘッドだけで 350 ドルもすることになる。また、これらのカーフスキンのヘッドは、状態がよくない場合はバンジョーに装着するのがやっかいだった。そのため、きっちり収まってないと、脆いプリフォーのポットメタル・テンションフープがゆがんだり、壊れたりしたのだろう。

これで、なぜ製作されて 15 年のこのグラナダがひどく摩耗したり破れていたりしたか、わかるであろう。また、同時代の、弾き込まれたオールドバンジョーに、壊れたテンションフープや交換したテンションフープがついていることが多いのは、これで説明がつくであろう。平均的なカーフスキンヘッドでは、ベストなサウンドを得ようとする、1 平方インチで数ポンドのトルクで (?)、現在のプラスチックヘッドよりもテンションを高めにする必要がある。また、カーフスキンヘッドは、湿度によって膨張したり、収縮したりと、常に変化している。最近のプラスチックヘッドなら、一旦きちっと張れば、ヘッドのテンションは交換するまでほぼ均一で一定している。プラスチックヘッドは、装着後に膨張したり収縮することはほとんどない。

考えてみると、この RB-グラナダ 9584-3 は、現在までアマチュアが所有したことがなく、自宅で楽しむのたためにとときどき弾くというようなことはなかったわけである。この楽器は、

工場から出荷されて納品されたその日から今日まで、移動の多いプロのミュージシャンによってハードに弾き込まれてきた。オリジナルのゴールド・クラムシェル・テイルピースもまた、この楽器がアールの手に渡ってからほどなく取り外されてようだ。ベニー・シムズが提供してくれた、あの"Foggy Mountain Breakdown" のオリジナルレコーディングを産んだ 1949 年のフラット・アンド・スクラッグス、マーキュリー・レコーディングセッションの写真（原文、pp.90）をよく見ると、このグラナダにより安価なタイプのテイルピースが装着されているのがわかるだろう。テイルピースの交換は、アールがバンジョーを手に入れてから一年以内、おそらく数ヶ月後のことであっただろう。

このような小さな問題はさておき、アールは、このバンジョーから何か深いものを聴いていたにちがいない。彼にわかったトーンは、何か特別なもので、それをなんとか引き出そうとしたのではないだろうか。

スナッフィー・ジェンキンスがわずかな金で質屋から買い取ったバンジョーは、これまで何度もミスプリントされている。実は、最近のアール・スクラッグスの本でもこのミスプリントがあった。私はスクラッグス夫妻に調査して得たことを伝えたのだが、文章を変更するのは間に合わなかった。私は徹底的にこのグラナダについて調査し、また両家の人々から個人的に話を聞いたが、すべての事実は、否定することのできない結果を指し示していた。スナッフィー・ジェンキンスは、このグラナダをヘンドリー・フィッシャーから買ったのである。ここで、この点をはっきりさせておきたい。

スナッフィーがサウスキャロライナの質屋から 40 ドルで買ったバンジョーは、このグラナダではなく、RB-4 フラットヘッドマスタートーン、シリアルナンバー 9639-1 なのだ。この RB-4 は、本書にも収録されているが、彼が生涯ずっと弾いていたバンジョーである。スナッフィーはこの話を何度も公の場でしているし、また印刷物にもなっている。だが、晩年、彼はしばしば、どちらのバンジョーの話をしているのか、混乱していたのではないだろうか。また、質屋の話は、本当は RB-4 のことなのだが、おもしろい話なので、アール・スクラッグスが所有し、演奏している有名なグラナダのことを話すときにも使った。そういうこともあり得る。これはおもしろい話で、事実、スナッフィーは 1940 年にこの 2 本のすばらしいバンジョーを同時に所有していた。しかし、真相は、グラナダをヘンドリー・フィッシャーから買い、RB-4 を 1940 年にノースキャロライナ州スパルタバーグの質屋から 40 ドルで買った。

グラナダを入手してまもなく、アールは、オリジナルのネックが大きすぎると判断し、自分で鬼目ヤスリをかけて幾分削った。その後、それをギブソンの工場に送ってネックのリシェイプをした。そのとき、割れたテンションフープや他の摩耗した金属パーツを交換した。またフレットの修理もしなければならなかった。死ぬかと思うほど待たされたあげ

く、バンジョーは真新しいフィンガーボードに、ポピュラーな「ボウタイ」インレイで戻ってきた。これは、当時のギブソン工場では、あたりまえの作業だった。これらのオリジナルフラットヘッドは、当時はコレクターアイテムとしての価値がなかった。オリジナルのパーツやフィンガーボードの保存など、次の修理をしようとする忙しい工場のリペアマンにとってなんの意味もなかったのである。「時」は金なり、古いちびたフィンガーボードを職人技で修理するのにかかる時間は、やるだけの価値がなかった。

ギブソン工場では、単に、古いフィンガーボードの下にホットナイフを滑り込ませて、完全に切り取り、「ボイタイ」インレイのついたその時代の新しいフィンガーボードと交換した。先に述べたように、これは当時の工場ではあたりまえの作業だった。このような作業を行っていたためにオリジナルのフィンガーボードがない 20 年代、30 年代のオリジナル・プリウォー・バンジョーを数多く見たり、所有したことがある。また、この頃、ギブソンはゴールドプレート・バンジョーを製作していなかったので、入手できる交換用の金属パーツは、当時製作していたニッケルプレート・バンジョーのパーツだけであった。アールは、フランジ、テンションフープ、アームレスト、ブラケットを交換することにした。オリジナルの多くは、すでに壊れていたり、ちびていたり、変形していたからである。

しかし、アールから聞いたところによると、彼はトーンリングのオリジナルメッキだけを変えないようにと工場に指示した。アールはたいへん賢明で、初期の頃から先見の明と知識があった。オリジナルフラットヘッドのトーンリングについて人々があれこれ言うようになるのは、ずっと後のことである。それで、アールは、この重要なパーツのオリジナルメッキをだめにしないようにと工場に頼み、オリジナルの金メッキをそのまま残した。アールはまた、リムのオリジナルのフィニッシュを変えないようにとも指示した。

アールは、1958 年頃まで、オリジナルネックにボウタイインレイという状態で弾いていた。そして、マイク・ロングワースにハーツアンドフラワーのパールのインレイを切り出してもらい、カリフォルニアのウォルト・ピットマンに別のネックを製作してもらった。これは、ピットマンのカムタイプ D チューナーが含まれていた。アールは、長年の間、いくつかのネックをこのバンジョーにつけていた。例えば、ナッシュビルの J.W.ゴーワーマホガニーネック、インディアナのジム・フォークナーのメイプルネックなどである。これらはすべて、H&F のインレイパターンであった。アールは、いつどのネックをつけたかなど、正確な日付ははっきりしないということだった。

1960 年代に、おもにミュージシャンの間でこんな噂があった。数名のこころないリペアマンがいるとか、ギブソン工場がオリジナルフラットヘッドのオリジナル金属パーツを盗み、新しいものと取り換えている、というのである。ちょうどその頃、アールは、盗難や不正使用などをおそれて、電気彫刻器でバンジョーに身元証明になるものを刻印していた。

バンジョーのいくつかの場所に名前やイニシャルを入れていたのである。それらは今でもディテールの写真ではっきりと見ることができる。ほとんどの人々は知らなかったが、前に述べたように、古いパーツを新しいパーツに交換していたのは、ギブソンの盗み行為でもなんでもなくて、工場の標準的な作業にすぎなかった。繰り返しになるが、当時はコレクターアイテムとしての価値がなく、標準的な作業手順でしかなかった。

にもかかわらず、そのような噂が広まりはじめた。多くの人は盗まれたと思い、アールに習って、名前、ソーシャルセキュリティナンバー、運転免許証番号や、そのとき思っていたことなどを彫った。手近な道具で、オリジナルフラットヘッドのリム、リゾネータ、ペグヘッドの裏、その他ありとあらゆるところに彫り込んだ。そのような状態の古いバンジョーを多数、見たり所有したりしたことがある。この本に収録した、マック・クロウのRB-75を見ると、彫り込みがもっとよくわかるであろう。

1958年、アールは、グラナダに新しいネックを着けることにした。そこで、ウォルト・ピットマンに頼んでマホガニーのネックを製作してもらい、マイク・ロングワースにカットしてもらったオリジナルの「ハーツアンドフラワー」インレイを入れたフィンガーボードをつけた。アールはまた、1フレットと15フレットに追加のインレイを入れてもらった。追加のインレイがあるハーツアンドフラワーのパターンは、このグラナダのオリジナル・インレイパターンでは標準ではなかった。だが、ギブソンは、1930年代のスタイル4とグラナダで、ハーツアンドフラワーをインレイに使用していた。

2006年2月24日金曜日、私は、ナッシュヴィルのダウンタウン郊外にある彼の美しい邸宅でアールと過ごした。私は、アールのRB-グラナダで何曲か弾かせてもらった。いつもそれを楽しみにしているのだが、その日はあまりジャムはせず、アールに昔のことについてあれこれ話をきいた。多くは、私がいつも考えていたけれど尋ねる機会がなかったことで、アールに話をきくことができよかったです。

この訪問の数ヶ月前、私はリッキー・スキャッグスのツアーバスに揺られて、アメリカのどこかにいた。そのことを誰もアールに尋ねていないことに気がついた。アールは、1949年12月終わりか1950年はじめにRB-グラナダを工場に送っている。というのは、彼は、1949年12月11日にこのグラナダで録音しているからだ。このときはまだオリジナルのハーツアンドフラワーのインレイで、まだ修理のためにどこかに送られてはいなかった。また、このグラナダが修理のために工場に送られてから数ヶ月の間、ギブソンにあったことは周知のことである。アールが、「もう戻ってこないんじゃないかと思うくらい（待った）」と言うのを聞いたことがある。では、グラナダの修理中、アールはどのバンジョーを弾いていたのだろうか？当時のフラット&スクラッグスのスケジュールは、かつてないほど過密なもので、アールがバンジョーを修理中だというだけではスケジュールを空けられなか

ったであろう。

このように考えて、その 2 月の快晴の金曜日には、アールにきこうと思って質問をいくつか用意していた。これでいくつかのことが明らかになる、本人から直接話を聞けると思った。

まず、アールは、グラナダのネックだけ修理に出したのか、あるいはバンジョーごと修理に出したのか？グラナダのポットが手元においておいた場合、オリジナルネックの修理の間、別のネックをつけてロードで演奏していたのだろうか？

バンジョーを丸ごと工場に送っていた場合、修理にかかった期間はどれくらいだったのか、金属パーツについてはどれを交換したのか？そして、もっとも興味深い質問は、グラナダが修理のために工場にあった間、アールはどのバンジョーを弾いていたのか？ギブソン工場は、おもに新しい楽器を製造して販売する目的で作られていた。そのため、工場は修理が遅いという悪評がついていた。修理はあまり儲からなかったからである。だいたい 6 ヶ月から 9 ヶ月待たされるということは、ふつうであった。

そして、このグラナダについていたオリジナルのネックはどうなったのか？修理の数年後に、アールはオリジナルネックを使わなくなっている。

喜ぶべきことに、82 歳になっても若々しいアールは、これらのことについてよく覚えており、かなりはっきりと答えてくれた。それによると、1949 年 3 月に、フラット&スクラッグスがヴァージニア州ブリストルの WCYB からテネシー州ノックスヴィルの WROL へ移ったとき、アールはグラナダを修理しようと考えた。そこで、ラジオのライブショーでレスターにお知らせをしてもらった。「アール・スクラッグスがギブソンのバンジョーを探しています！」すると、その直後、ある女性がラジオ局に電話をしてきた。彼女の夫は 1930 年代にギブソン・マスタートーンバンジョーを新品で買った。夫は最近亡くなり、アールが興味があるなら、売りたいと申し出た。

アールがその女性と電話で話したところ、彼女はノックスヴィルに住んでおり、バンジョーはたいへんいいコンディションだが、チューナーの 1 つが壊れて動かないと言った。アールがバンジョーを見に行くと、2 弦のチューナーのねじがゆるんでおり、締める必要があっただけだった。それは、1930 年製 RB-3 マスタートーンのスタンダードモデルで、じつにいいバンジョーだった。現在では、そのようなオリジナルフラットヘッドマスタートーンに、アールが話したようないきさつで出会って買うことはあり得ない。

これ（本文、pp. 58）が、グラナダを修理中にアールが弾いていたバンジョーである。こ

の写真は、友人のジェリー・キーズの所有である。ジェリーは、素晴らしいバンジョープレイヤーで、熱心なフラット&スクラッグスのコレクターでもある。この写真は、演奏 1949 年秋または 1950 年はじめ頃、ケンタッキー州レキシントンでフラット&スクラッグスがクレイ・ジェントリー・アリーナで演奏したときのもので、アールがその RB-3 スタンダードモデルを弾いているのが写っている。写真は、地元紙から切り抜いたものである。よく見ると、この RB-3 は、アールが買い取る前、すでに工場で修理されている。フィンガーボードは、当時の工場のインレイであるボウタイパターンが施されているが、ペグヘッドのインレイは、スタイル 3 のものであることがはっきりわかる。

工場での修理で、グラナダは、オリジナルの金メッキのコーディネイターロッド、リゾネータラグ、20 ホールのトーンリングを除き、すべての金属パーツがニッケルメッキされたパーツに交換された。このニッケルメッキされたパーツは、当時、ギブソンが製作していたものである。戦後間もないこの頃は、ボウタイインレイを RB-150 につけていた。また、おそらく戦後最初のスタイルと思われる Mastertone と彫ったパール片をフィンガーボードに取り付けていた。だが、ギブソンはマスタートーンすら製作していなかった。なぜなら、マスタートーンスタイルのスタイル 250 が最初に登場するのは 1954 年だからだ。

アールがギブソンに強く指示したことは、トーンリングとウッドリムだけは絶対にさわらないようにということだった。実は、工場は、新しい戦後のフランジのサイズに合わせるため、リムの直径をほんのわずかに削ったのだが、フィニッシュを施した後では、この削った跡はアールにはまったくわからなくなっていた。オリジナルのフィンガーボードは取り除かれて、当時のボウタイインレイのフィンガーボードに交換された。この作業は、アールが頼んだものではなかった。彼は、フレットジョブを頼んだだけだった。だが、前にも述べたように、フィンガーボードをそっくり交換するのが当時の修理のやり方だった。ネックも、アールが頼んだサイズにカットして、リフィニッシュされた。工場側は、彼のいうとおりにネックを削ったらネックが反るかもしれないと、修理の前に注意していた。そして、実際に、バンジョーがアールの手元に戻って数年後にそうってしまった。

この反りが原因でチューニングの問題もあったけれど、彼はボウタイインレイのついたグラナダのオリジナルネックで約 8 年間、1958 年まで弾いていた。そして、前に述べたネックの製作を依頼し、1960 年代にもまたネックを付け替えた。1956 年の写真(本文、pp.58)を見ると、アールがさまざまな方法でオリジナルのグラナダのネックからその本当の音を引き出そうとしていたことがわかる。4 フレットの前側に小さな釘が打ってある。3 弦の音をもっと引き出そうとして打ったものだ。

この最も重要なグラナダのオリジナルのネックがどうなったかは、よくわからない。どこかに放ったか、引っ越した前の家に置いてきたのか、あるいは、1950 代後期か 1960 年

代はじめに新しいフィンガーボードとペグヘッドを重ねづけして変更部分を隠してネックを一新し、別のバンジョーにインストールして、「パーツバンジョー」としてスクラッグスの名前で売ったのか、ルイズもアールも、定かでなかった。誰かが何年も前に買った古いパーツバンジョーにこのネックがついているかもしれない。それは、この世のどこかにあるにちがいない。

アール・スクラッグスがこの特別な楽器で実験することで私たちにもたらした進化がどれほどのものであるか、わかるだろうか。過去 50 年以上にわたり、私たちバンジョーピッカーが皆、恩恵を受けてきた独創的で大きな進化があったのである。それがすべて、あたりまえで、ずっと昔からそうになっていたと思っている。アール自身のアイデアや発明だと言えることの 1 つは、5 弦の釘である。これのおかげで、キーが変わってもオープン G ポジションで弾くことができる。これは、2006 年 2 月のその日に、彼の家でアールとしばらく話したことの 1 つだ。アールが 1945 年にビル・モンローのトライアウトを受けることにしたとき、モンローの音楽についてあまり知らなかったという。

すぐにわかったことは、モンローは、当時の多くのオールドタイムやカントリーのミュージシャンがやるような、G、C、D など、スタンダードなオープンキーでは演奏しないということだった。モンローは、A、B、B \flat 、F など、当時はあまり使わなかったコードで弾いていた。アールはすぐにそれがわかったので、A、B、B \flat などのキーでもオープン G チューニングでバンジョーが弾ける方法を考え出さなければならなかった。それで、ヘアピンを切って、曲げたものをフィンガーボードに取り付けた。これが最初の 5 弦の釘である。天才だ！もう 1 つの発明は、D チューナーである。この発明がブルーグラス・バンジョーの演奏にどれほど影響を与えたかは、バンジョープレイヤーならよくわかるだろう。

このグラナダは、そのような重要な瞬間にアールの腕の中にあった。それはアールが最初にインスピレーションを感じたときだった。多くのアイデアは、ブルーグラス・バンジョーの演奏の進歩という点で、モニュメントとなった。このバンジョーは、長年にわたってアールのアイデアを試すための助手であり、その試みをともにくぐり抜けてきた。確かなことは、このグラナダはアールの手によると特別な音がするという事だ。まるで、互いの魂が結び合っているかのようである。1 本のバンジョーを、それだけを 60 年間も弾いたからなのだろうか。

自宅を訪問し、このバンジョーの写真を撮らせてくれたことを、アールに感謝する。彼のプレイは、彼にも計り知れないほどの意味が私にはある。それは、言葉では言い表せない。